

研究ノート

精神科における男性看護師の役割意識とその関連因子 —不穏時対応以外を中心に—



堀井 啓史¹⁾、横山 由香¹⁾、河瀬 貴志¹⁾、牧野 耕次²⁾

¹⁾滋賀県立精神医療センター

²⁾滋賀県立大学人間看護学部

背景 男性看護師の就業者は大幅な増加傾向にあり、近年は一般科病棟に配属・希望する男性看護師も増加している。男性看護師としての職場も、選択しやすい環境へと変化しつつあるが、精神科では現在でも他科と比較して男性看護師の割合が高い。精神科において男性看護師は、不穏時対応における「力」を求められ、その役割を少なからず感じ、発揮している。しかし、不穏時対応以外でも、男性看護師は女性とは異なる役割を発揮し担っていると考えられる。

目的 精神科における男性看護師の役割意識とその関連因子を明らかにすることを目的とした。とくに、不穏時対応以外の役割に焦点をあてた。

方法 近畿圏の精神病院に勤務する男性看護師10名を対象に、男性看護師の役割意識に関する半構成的面接を行った。逐語録を質的帰納的に分析し、順に下位カテゴリーおよびカテゴリーを抽出した。

結果 分析の結果、精神科における男性看護師の不穏時対応を除いた役割意識として、「男性であることを生かした関わり」「男性看護師としての意識はしない」「女性患者への対応で意識をする」の3カテゴリーが抽出された。また、男性看護師の役割意識に関連した因子として、「使命感としての不穏時対応」「男性看護師のイメージをもっている」「少数派であることに関する思い」の3カテゴリーが抽出された。

考察 男性看護師は日常の看護の中で、或いは業務の中で男性であることを自身の強みとして、行動を起こしていることが分かった。これにより、精神科看護において、男性看護師の役割分担に関する示唆が得られた。さらに、少数派である男性看護師の役割が明確になり、女性看護師と協働していく上での一助となると考えられる。

結語 1. 「男性であることを生かした関わり」「男性看護師としての意識はしない」「女性患者への対応で意識をする」が、不穏時対応を除いた男性看護師の役割意識のカテゴリーとして抽出された。

2. 「使命感としての不穏時対応」「少数派であることに関する思い」「男性看護師へのイメージを持っている」が、男性看護師の役割意識の関連因子におけるカテゴリーとして抽出された。

キーワード 精神科看護 男性看護師 役割

Gender-role attitudes and other related factors of male psychiatric nurses, with special reference to their roles in non-restless situations

Hiroshi Horii¹⁾, Yuka Yokoyama¹⁾, Takashi Kawase¹⁾, Koji Makino²⁾

¹⁾Shiga Mental Health Medical Center

²⁾School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2011年9月30日受付、2012年1月9日受理

連絡先：牧野 耕次

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail: makino@nurse.usp.ac.jp

I. 緒 言

男性看護師の就業者は、看護師全体の就業者からの割合で考えると、わずかに2.85%である。しかし、就業者数の変遷で見ると、平成10年度は17,807人、平成14年度では26,160人、平成18年度には38,028人と近年大幅な増加傾向にあり¹⁾、今後男性看護師はより一般的な存在となっていくと思われる。元来、男性看護師はICU・救急・精神科など、限局された部署に配属されてきた。近年、一般科病棟に配属希望する男性看護師も増加し²⁾、男性看護師としての職場も、より選択しやすい環境へと変化しつつある。

精神科では男性看護師の存在は他科と比較しても、そ

の割合は高く、現在もそれは大きく変わらない。本研究者の所属する施設の部署においても、やはり男性看護師の割合は高く、30%以上を占めている状況である。元来女性の職業であった看護職であるが、矢原²⁾によると、「精神科における看護師の58%が性差を意識した場面を経験していた。そして、性差を意識した看護師ほど、性差に対して肯定的に看護に取り入れ、専門性を発揮しようとしている」とあり、看護師の性差意識の有無が明らかにされている。

一般的に男性看護師には腕力があるという社会通念から、北林³⁾は「医師や女性看護師を守る役割」を一般科の男性看護師に求められる役割だと述べている。また、精神科の看護師は、暴力を振るう患者に対応する場面において、「男性看護者の方が専門性を発揮できる」と考えている⁴⁾。男性看護師は前述の通り、不穏時対応としての「力」を求められ、その役割を男性看護師として少なからず感じ、発揮していると思われる。しかし、不穏時対応以外でも、男性看護師は女性とは異なる役割を發揮していたり、その必要性を担っていたりすると考えられる。例えば、児童精神科病棟における男性看護師は、特に男児に対して「男性モデル」としての役割をもち、女兒に対しては意識的な距離感から性別の違いを認識させる役割を担っているとする報告もある⁶⁾。

また、精神科において、男性の看護師としての役割をとることに関連して、特別な思いを抱いているのではないかと考えた。

そこで本研究では、精神科における男性看護師の役割意識とその関連因子を明らかにすることを目的とした。とくに、不穏時対応を除いた役割に焦点をあてた。男性看護師がどんな思いをもって仕事に従事しているのか、その現状を明らかにすることによって、今後、精神科看護における男性看護師の役割分担に対する理解が深まり、少数派である男性看護師の職業的アイデンティティ形成に寄与するものと考えられる。

II. 研究方法

1. 対象者

近畿圏の精神病院に勤務する男性看護師10名を対象とした。

2. 調査期間

2010年11月5日から12月30日まで。

3. 調査・分析方法

それぞれ個人に対して、男性看護師の役割意識に関するインタビューガイド(表1)に基づき、半構成的面接を行った。インタビューでは、不穏時対応以外の役割につ

いて回答を求めた。プライバシーが確保できる場所で30分程度の時間を設けて面接を行い、レコーダーにて録音した。そこから得られたデータを1名ずつの逐語録にし、質的帰納的に分析を実施した。

分析の手順は逐語録を文脈ごとに整理しコード化した。明らかに研究の目的に関係ないものは、分析の対象から外した。コードごとに類似性で分類し、下位カテゴリーとした。さらに、同様の手順で分類し、カテゴリーとした。

結果をまとめ、対象者と同病院に勤務する看護師、さらには精神看護学領域に所属し質的研究経験のある教員2名に研究結果を提示し、フィードバックを受けた。

4. 倫理的配慮

研究の概要を文書と口頭にて説明し、研究対象者の自由意志に基づく同意を得た。研究に同意しないことや中止できること、その場合でも不利益を被らないことを保証した。個人が特定されないようデータの取扱いに注意し、得られたデータは本研究にのみ使用することとし、守秘義務を遵守した。インタビューはプライバシーの確保できる場所で行なった。本研究の実施にあたっては、対象施設の病院の倫理委員会の承認を得た。

III. 結果

1. 対象者の属性

対象者の年齢は、30～39歳4名、40～49歳6名であった。精神科での経験年数は、1～10年3名、11～20年5名、21年以上2名で、平均経験年数は12.9年であった。精神科のみの看護師経験者はその内の7名であった。

2. 精神科における男性看護師の不穏時対応を除いた役割意識

対象者から得られたデータを分析した結果、以下の通り、3個のカテゴリーとそれぞれに属する9個の下位カテゴリーが抽出された(表2)。カテゴリーには<< >>、下位カテゴリーには【 】を付し、逐語録からの抜粋は、

表1 男性看護師の役割意識に関するインタビューガイド

- 男性看護師の役割としてイメージすること
(不穏時対応以外での男性としての役目)
- 仕事をする中で性別に関して意識していること
- 自分が期待されていると感じる役割
(誰から期待されているか <患者・看護師・医師>)
- 自分が男性看護師であることをどう捉えているか

表2 精神科における男性看護師の不穏時対応を除いた役割意識

《カテゴリー》	【下位カテゴリー】
《男性であることを生かした関わり》	【看護者自身の性別を生かした関わり】
	【男性の強さを生かした対応】
	【父親役割を意識した関わり】
	【男性として個を生かした関わり】
《男性看護師としての意識はしない》	【積極的に性別を意識しない】
	【特に性別を意識しない】
《女性患者への対応で意識をする》	【女性患者へのコミュニケーション時に性別を意識をする】
	【女性患者へのケアも積極的に行う】
	【女性患者へのケアはしない】

「 」を用いポイントを変え斜体にして表記し、順にそれぞれ説明していく。

1) 《男性であることを生かした関わり》

男性看護師として男性であることを生かした役割意識をもっている内容が集約された。以下、4個の下位カテゴリーから成る。【看護者自身の性別を意識した関わり】【男性の強さを生かした対応】【父親役割を意識した関わり】【男性として個を生かした関わり】の順に説明する。

(1) 【看護者自身の性別を意識した関わり】では、男性という性別を意識し、性別を活用しながら患者と関わっていた。

「異性ということでの好意を生かして関わる」

「男性を拒否している場合は(女性に)任せる」

「同性にしかできない性的な話などして、場を和ませたりする」

(2) 【男性の強さを生かした対応】

ここでは、男性の特性としての物理的な力強さや、男性の雰囲気としての力強さを意識した関わりが見られる。患者が冷静になり行動をセーブするなど良いコントロールへの働きかけができる。しかし、逆にそのコントロールに対して、自戒する言葉も聞かれている。

「女性スタッフから力を求められている」

「男性の力強さを看護というより業務を円滑にするために力強く自分を発揮させる」

「調子の悪い患者を誘導したりセーブして円滑に業務を

回していくような悪い癖があったと思う」

「男性が前に出て関わるのはすごく威圧感があると思う」

(3) 【父親役割を意識した関わり】

このカテゴリーでは、父親役割に関する患者のニーズに即した関わりができ、モデル的役割や個を引き出す役割ができる。

「父親役割を期待されていると感じる時がある」

「患者が父性を求めてたら前へ出ます」

「父性を求めてくるときは心理的な距離に気を付け、ただずっと聞いて、自信を持って言ったりとか、力強く接していく」

(4) 【男性として個を生かした関わり】

一人の男性として、患者の健康面を増進する関わりや、関係性を構築しようとしている点が挙げられる。また、看護師の年齢や経験により役割意識が変化していた。

「お父さんや彼氏がどう考えているのか意見を求められる事がある」

「話し相手として中年おやじの話を聞きたい患者もいるだろう」

「患者の成長を待つ時に1人の男性として年相応の生の自分を出す事が必要になる」

「最初は患者から見た、子どもという役割、あるいは孫的な役割。年齢を重ねるに従い、男兄弟や父親役割を担うことになる」

2) 《男性看護師としての意識はしない》

男性の看護師であることを特別視していないという意見である。【積極的に性別を意識しない】【特に性別を意識しない】という2個の下位カテゴリーが抽出された。

(1) 【積極的に性別を意識しない】

ここでは、男性看護師である事を、敢えて意識しないで看護や業務にあたっているという、性別を意識しないことに対する積極性が見られた。性別を意識する方が弊害でありマイナスになる、意図的に抑える等敢えて意識しない方がプラスになる、という考えである。「今の時代にどちらかの性しかない職業は専門職として確立されていかないと思う」

「男性的な看護役割を意識すると無理な看護援助になることが多かった」

「日々の業務では男性看護師であるということは意識しない。むしろ、業務が進まないのが、意識してはいけないと感じる」

(2) 【特に性別を意識しない】

女性看護師と変わらず、特に性別を意識せず看護や業務にあたっている。あるいは働く上では同じという思いが見られた。

「男性女性の違いはあまり意識していない」

「不穏時を除いては、男性であることは意識しない」

「男性も女性も関係ないという教えを学生の頃に受けた」
3) <<女性患者への対応で意識をする>>

身体的ケアを含む女性患者との関わりの中で、男性看護師が意識する内容が集約された。3つの下位カテゴリー【女性患者へのコミュニケーション時に性別を意識する】【女性患者へのケアも積極的に行う】【女性患者へのケアはしない】から構成される。

(1)【女性患者へのコミュニケーション時に意識をする】

ここでは、日常的に女性患者と関わる際にも、異性として対応を変えるなど、意識しているという点が見られる。距離感を意識し、相手を刺激しない、不快のないようにしようと配慮している。

「女性患者に対しては極力体は触らない、距離も遠い」
「ドアを開けたままで入るなど、女性を意識した対応をする」

「女性患者に対しては気を遣うという思いがある。」

「女性患者に対しては、言葉を選び、相手の反応を見ながら、どの程度くだけて話していいか考える。」

(2)【女性患者へのケアも積極的に行う】

男性看護師でも、女性のケアに入れるという思いや、患者の許可があれば入るべきだという意見が聞かれる。異性患者に対する配慮と専門職としてのジレンマを持っているが、積極的に役割を果たそうという思いはある。
「患者さんが同意すれば女性のケアにも入るべきである」
「ケアは基本的に同性だが、業務が回らないので、ある程度は仕方がない」

「女性患者に対しては、仕事というか、割り切ってケアできる思いがある」

(3)【女性患者へのケアはしない】

男性として女性のケアに入ることは困難である事、やるべきでないという意見が挙げられる。患者が嫌がるのではないかという思いを優先し、同性でのケアの必要性を感じている。

「入浴介助とか排泄介助なんかはできない」

「女性患者への処置は配慮する」

「女性のケアに入るのには抵抗がある」

「女性のケアは、高齢者には特に抵抗がない。若い女性には抵抗がある」

「年齢は関係なく、女性患者であれば、ケアには入れない部分があり、それは越えられない壁である」

3. 精神科における男性看護師の役割意識に関連した関連因子

上記で分類された本研究のテーマであるカテゴリーとは別に、関連因子として、3個のカテゴリーが抽出された(表3)。

1) <<使命感としての不穏時対応>>

表3 男性看護師の役割意識の関連因子

<<カテゴリー>>	【下位カテゴリー】
<<使命感としての不穏時対応>>	【使命感としての不穏時対応】
<<男性看護師のイメージを持っている>>	【男性看護師の良いイメージ】 【男性看護師の悪いイメージ】
<<少数派であることに関する思い>>	【女性社会参入への不安】 【男性看護師同士の関係】 【男性看護師の位置づけに関する希望】

今回の研究において、不穏時対応を除いた男性看護師の役割意識をテーマにし、データ収集を試みたが、事前に敢えて不穏時対応を除くと明言したにも関わらず、不穏時対応に関する多くのデータが得られた。それほどまでに不穏時対応は男性看護師の役割として、納得するしなにかかわらず「強く意識されている」という事実を無視せず、関連因子としてあえて抽出した。

「応援には、男性看護師が行くのが当然という思いを持っている」

「不穏時対応は怖い嫌だけど、女性に行かせるわけにはいかないと感じる」

2) <<男性看護師のイメージをもっている>>

男性看護師がもつ、男性や男性看護師のイメージとして多くの意見が挙げられた。大半が良いイメージであり、個人のもつイメージが強く、はっきりした特性とは明言し難いため、関連要因であると分析した。2つの下位カテゴリー【男性看護師の良いイメージ】【男性看護師の悪いイメージ】から構成される。

(1)【男性看護師の良いイメージ】

対象者が語った男性看護師に関するさまざまな良いイメージである。

「男性看護師は優しいイメージがある」

「男性の方が説得場面での対応が上手い」

「より人間らしさを感じるのは男性」

「女性は慣れていくと敬語がなくなる。男性は慣れた人でも最初は敬語で話していると思う」

「男性看護師は臆病さがあり、対応が丁寧」

(2)【男性看護師の悪いイメージ】

対象者が語った男性看護師に関する悪いイメージであるが、良いイメージと比べ、意見としては少ない。

「男性看護師は細かいことを気が付かないかもしれない」

「男性はがさつであり、細かい所を配慮するのは女性」

3) <<少数派であることに関する思い>>

看護職全体と比較すれば、精神科の男性看護師の割合は高いが、看護職は元来女性の職場であり、男性看護師は少数派であるという意識が強くさまざまな思いを抱いていた。【女性社会参入への不安】【男性看護師同士の関係】【男性看護師の位置づけに関する希望】という3個の下位カテゴリーから構成される。

(1) 【女性社会参入への不安】

多くの対象者が看護を女性が主に活躍してきた現場であるということに触れ、そこで仕事をする事の不安を抱いていた。

「看護職を選択する時女性が主に活躍する職種に入るの違和感と抵抗が少しあった」

「男性が女社会の中で生きていくという思い(があった)」

(2) 【男性看護師同士の関係】

少数派であることや同じ性別であるために、男性看護師同士の信頼感や後輩の役に立ちたいという意識やつながりが強く表れている。

「男性とはあうんの呼吸で仕事ができる」

「男性看護師のお手本でいられたらという思いがある」

(3) 【男性看護師の位置づけに関する希望】

少数派であることや不均衡に関する専門職としての懸念と男性看護師の増加に関する願望が表れている。

「男性看護師が増えた方が専門職として確立されていく気がする」

「男性看護師の存在や、役割、活躍を世間一般の人にもっと知って欲しい」

IV. 考 察

精神科における男性看護師の役割意識として、今回得られた3個のカテゴリーから、関連因子である3個のカテゴリーの順に考察を述べていく。

1. 精神科における男性看護師の役割意識

<<男性であることを生かした関わり>>では、男性看護師は日常の看護の中で、或いは業務の中で男性であることを自身の強みとして、行動を起こしていることがわかる。

<<男性であることを生かした関わり>>の下位カテゴリー【看護者自身の性別を生かした関わり】では、患者との性別の違いにより、関わりの変化をつけていることがわかる。男性患者に対して、より距離を近くにおいて関わったり、女性患者に対して距離感を気を遣う反面、異性として意識できるように関わったりしていることがわかる。男性患者に対しては関係性の促進となり効果的である。異性として意識できるようにする関わりの中には、患者に好意を抱かれた際には、注意しながらも、うまく患者

の治療意欲に繋げたり、男性看護師の対応によって、女性看護師とは異なる対応を患者が見せたりする場面で性別役割を意識しているようである。

【父親役割を意識した関わり】では、父性を意識する、という言葉が多く聞かれた。父親役割という言葉に関しては、今回の研究対象者の平均年齢が37歳と実際に家庭で父親として生活している年代が多かった事にも起因すると考えられる。また、石田ら⁶⁾は、児童・思春期精神科病棟において男性看護師は「男児には男性モデルとして重要な役割があり、女児においてはやや距離をおいて関わることによって性差を認識させ、性同一性を一致させる役割を担っている」と述べている。また、「男性看護師は両性の児童の関わりによって、自己の性を認識させ、アイデンティティの確立へとつなげる役割がある」とも述べており、児童・思春期に限らず、男性看護師が精神病患者に対して持つ、一つの存在意義として、父親役割を担っているのだと思われる。

【男性として個を生かした関わり】では、若いころは孫的な立場からの関わりをし、看護師が年齢や経験を重ねるにしたがい、兄弟的な立場からの関わり、父親的な立場からの関わり、と役割意識が変遷しているという意見も聞かれた。

看護師は家族の役割を時に果たす必要があるが、家族に取って代わることは決してできないため⁷⁾、看護師が家族役割を担うには限界があり、父親役割としては限定的なものとして意識する必要があるだろう。

精神科では患者との関係性や関わりは看護を行うにあたり、非常に大切である。日常的な関わりでは、父親役割に限定されることなく、男性であることに関して、より関係性の構築しやすい位置づけに置こうとしている事が分かる。また、一人の男性としての自然な関わりが、患者の気持ちの緩和や自己開示を促し、身体的、精神的にも健康面の増進を図る治療的な関わりになるといえる。

【男性の強さを生かした対応】では、男性看護師は自身の男性という性に対して、威圧感があるという、発言をしている。その威圧感や力により、患者を男性主体で管理するという陥りやすさについて危惧する。未然に不穏化を防ぐ抑止力とも成りえる男性としての利点といえないこともないが、実際に患者に与える印象や影響を考えると、男性の1つの注意点としても考えていく必要がある。

<<男性看護師としての意識はしない>>の下位カテゴリー【積極的に性別を意識しない】は、男性として性別を意識することに対して批判的である。もう一つの下位カテゴリーである【特に性別を意識しない】は自身が男性の看護師であることに対して、特別な意識をしていない。前述の<<男性であることを生かした関わり>>と比べると、自身を男性の看護師であることを、特別なものと考えな

い、相反するカテゴリーである。元来、女性の職業であった看護職は、近年男性が増加してきたとはいえ、やはり男性には様々な葛藤がある職業であると言える。そのような環境に身を置く男性看護師は、男性であることに由来する働きにくさから、特別な意識を抱かないようにしている側面もあるのではないかと考える。特に前者に関しては、敢えて男性という性別を意識しないことにより、女性看護師との差異を可能な限り除去しようとし、女性社会へ順応しているのではないかと考える。

また、対象者の中には、〈男性であることを生かした関わり〉において、男性としての特異的な関わり方を述べたにも関わらず、このカテゴリーにおいて、男性として意識するところはない、と述べている事がある。男性の看護師として少なからず働きにくい面があることに対して葛藤があり、役割を模索しているということが推察される。

〈女性患者への対応で意識をする〉の【女性患者へのコミュニケーション時に性別を意識する】では、女性患者に対して、身体ケア以外に日常的な関わりの中でも、特別意識する点がある事がわかる。中島ら⁸⁾は、女性患者は男性看護師に話してもわかってくれないのではないかとという心理的な部分での問題をあげている。また、性差は、患者が看護師への共感を得難くする要因の一つであると述べているように、男性看護師は共感が得難いと女性患者の思いに慎重になっていることがわかる。また、行動としても、室内での対応時にはドアを開放しておくなどの行動を取っており、これは男性看護師自身を守る行動でもあり、前述した威圧感を軽減させるものでもありと考えられる。

【女性のケアも積極的に行う】では、患者本位ではあるが、許可があれば男性であっても女性のケアに入るべきであるという意見や、特に抵抗を感じないという意見が聞かれた。看護師として、男女の区別なく専門職としての意識を強くもっていることが分かる。

【女性患者へのケアはしない】では【女性のケアも積極的に行う】に比べ、女性患者に対するケアについては否定的である。精神科においては、一般科に比べると身体的ケアを行う機会は少ないと思われるが、やはり一般科病棟と同様に⁹⁾困難さが聞かれていた。精神疾患には思春期に発症するものもあるため若年層の患者も入院している。その為、身体的ケアの場面では、「若い女性には抵抗がある」という意見もあり、より介入の難しさを感じやすいものと思われる。勤務する領域に関わらず、女性に対する身体的なケアは、男性看護師にとって今後も取り扱われることのない限界の一つであると言える。

2. 精神科における男性看護師の役割意識の関連因子

〈使命感としての不穏時対応〉については、山田ら¹⁰⁾

が「暴力をふるう患者に対して徒手抑制を行う」(素手で不穏患者の行動を抑える)状況では、男性看護師の方が専門性を発揮できると認識していたと述べているのと同様に、男性看護師は、不穏時については、男性が対応しなければならないという使命感を持っている事がわかる。殊更、今回はインタビュー前に、「不穏時対応を除く」と明言していたにも関わらず、多くの不穏時対応についての意見が聞かれている。これにより、精神科で勤務する男性看護師にとっては、不穏時の対応は非常に大きな位置づけであるということが再確認できた。

〈男性看護師のイメージ〉

「男性看護師の方が優しい」「より人間らしい対応をする」「説得場面での対応がうまい」など、抽出されたイメージの中でも、大半が良いイメージであった。個人のもつイメージが強く、はっきりした特性とは明言し難いが、男性看護師は、自身を含む男性看護師像として、より男性であることを特別視する傾向にあると考えられる。女性社会にある男性だからこそ、より自身の存在や役割を、意識するのだと推察される。それぞれ彼らの抱く男性看護師のイメージは、それぞれ自身が自身の役割意識として彼らに内在しているのではないかと考える。少数派であるが故に、自身の役割意識を確立しようとし、より働きやすい環境を構築しようとする為に、男性看護師の存在に対して肯定的なイメージを抱く傾向にあると思われる。

〈少数派であることに関する思い〉

看護師は女性社会というイメージがある。【女性社会参入への不安】はマイノリティ集団に属する不安として、対象である精神科における男性看護師に共通していた。精神科では男性看護師が多いが、看護職の大半を占めるのは女性であることに起因すると推察される。【男性看護師の位置づけに関する希望】では、今後の看護職について、自身の存在を含む男性看護師の存在が、社会的により認知されることを望む意見が聞かれた。マイノリティ集団に属する男性看護師は、女性看護師との協調性を保ったり、リーダー的存在として期待されるプレッシャーを受けたり、不穏時対応を求められている雰囲気を感じているようである。そのようなストレスフルな環境において、男性看護師同士は、好印象を抱いたり、結束感を感じたりするものが多く、【男性看護師同士の関係】は互いに支えあい結束を強めていると考えられる。〈男性看護師としての意識はしない〉というカテゴリーとは相反し得られた意見であり、全体の男性看護師の役割意識については、両価的なものも含め多様な意識が含まれていた。男性看護師の役割意識の関連因子から、男性看護師は男性としての役割意識を感じているが、その役割意識を感じる背景には、自身の置かれている環境や個人の価値観、感情などが強く影響していることが示唆された。

精神科における男性看護師の不穏時対応を除いた役割意識とその関連因子が抽出され、精神科において、男性看護師が男性であることを時にいかし、反対に、時に男性を意識せず看護師であることを意識し、対象が女性であれば、対応方法を意識し配慮していることが明らかになった。男性看護師は状況に合わせて、性別に関して意識するポイントを変化させて患者にかかわっていた。このとき一貫している基準は、患者の利益となるかどうかであり、本質的な看護師の視点が性別にかかわらず共有されていた。

O'Lynn¹¹⁾は、男性看護師は養成課程から少数派であるため、性別を強く意識し孤立しやすく、社会文化的、歴史的違いはあるが、国際的に同様の経験をしていると指摘している。我が国の精神科では、他科と比較しても男性看護師の比率は高いが、本研究結果の関連因子では同様に少数派であることに、【女性社会参入への不安】を持ち、【男性看護師同士の関係】を大切にするなど、≪少数派であることに関する思い≫が語られ、男性看護師における国際的な傾向と大きな相違はみられなかった。

本研究結果は、「誰が行っても同じ看護」を重視し科学的であることを前提、もしくは、女性が行うことを前提としている看護の教科書にはほとんど記載されていない事項であり、孤立感を持ちながら精神科で看護を行う男性看護師の職業的アイデンティティ形成の一助となる可能性を含んでいる。

本研究の対象は、1精神病院に勤務する男性看護師10名であり、対象者や施設の背景などの特性によるデータの偏りがあり、一般化するには限界がある。今後、複数の施設においてもデータ収集を重ねる必要がある。

V. 結論

1. ≪男性であることを生かした関わり≫≪男性看護師としての意識はしない≫≪女性患者への対応で意識をする≫が、不穏時対応を除いた男性看護師の役割意識のカテゴリーとして抽出された。
2. ≪使命感としての不穏時対応≫≪少数派であることに関する思い≫≪男性看護師へのイメージ≫が、男性看護師の役割意識の関連因子におけるカテゴリーとして抽出された。

謝辞

本研究にご指導・ご協力頂いた皆様に心より感謝致します。なお、本研究は、滋賀県立大学地域交流看護実践研究センターの平成22年度共同研究費助成を受け実施しました。

文献

- 1) 日本看護協会出版会編：看護関係統計資料集、日本看護協会出版、12、2010
- 2) 山田光子、清水恵子、伊藤収、松浦好徳、入野野正、横森いづみ、齋藤淳子、鈴木美保、津端飛鳥、野澤由美：精神科看護の専門性とジェンダーロールに関する研究 性差を意識した場面とその構成要素、日本精神科看護学会誌、50(2)、207-211、2007
- 3) 北林司：男性看護師が認識する男性であることの特異性 X県におけるインタビュー調査から（特集 女性看護師の皆さんへ--ケアする男の物語）、看護学雑誌、66(11)、1022-1027、2002
- 4) 鈴木美保、松浦好徳、入野野正、横森いづみ、齋藤淳子、野澤由美、津端飛鳥、山田光子、清水恵子、伊藤収：精神科急性期看護の専門性とジェンダーに関する意識調査 Y県内の公立病院を除く精神科看護者の認識、日本精神科看護学会誌、50(2)、212-216、2007
- 5) 林克明：男性看護師の持つ専門職としての意識～カリキュラムの改正前・後よりみる～、日本看護学会論文集 看護総合、34、210-212、2003
- 6) 石田徹、奥村美奈、本吉恵子：児童・思春期精神科病棟における男性看護師の役割とその意義に関する研究-児童・思春期精神科病棟に従事している男性看護師の調査から-、日本看護学会論文集 小児看護、37、233-236、2006
- 7) Artinian, B. M.: Risking involvement with cancer patients. Western Journal of Nursing Research, 17(3), 292-304, 1995
- 8) 中島民保子：精神科に入院中の患者へのケアと看護師の性別の関連性について-インタビューを通して患者の思いを知る-、日本看護学会論文集 精神看護、37、133-136、2006
- 9) 坪之内建治、有田広美：男性看護師が感じる困難とそれらの困難を経験して成長する過程、日本看護学会論文集 看護管理、39、309-311、2009
- 10) 山田光子、清水恵子、伊藤収、松浦好徳、入野野正、鈴木美保、横森いづみ、千野良子：精神科急性期看護の専門性に関する研究 精神科急性期看護の専門性とジェンダーロールに関する意識調査、日本精神科看護学会誌、49(2)、168-172、2006
- 11) O'Lynn, C. E.: Men in nursing; history, challenges and opportunities. Springer, New York, 2007

(Summary)

Background The number of male nurses is considerably increasing and many of them have sought to work in general medical units in recent years. Their working environments are improving, giving them more latitude in their choice of career. Nevertheless, the ratio of male nurses to female is still higher in psychiatric wards than other wards. In psychiatric wards, male nurses are expected to exert their "physical strength" in a restless situation. They often feel such a role as a duty and actually play this role. Yet, it is probable that male nurses play distinct roles in psychiatric wards even in non-restless situations.

Objective The purpose of this research is to clarify the gender role-attitudes and their related factors of male psychiatric nurses in non-restless situations.

Methods We conducted semi-structured interviews to 10 male nurses working in psychiatric hospitals in Kinki Region for deciphering their gender role-attitudes.

Results We extracted 3 categories and 9 subcategories by analyzing transcripts qualitatively and inductively. Three extracted categories were: 1) gender-role awareness in nursing care, 2) gender-role unawareness in nursing care, and 3) self-conscious care for female patients. As associated factors related to role attitudes of male nurses, three categories were also extracted. They were; 1) treating patients in a restless situation due to the sense of vocation, 2) having the image of male nurses, and 3) self-conscience as a minority.

Conclusion This research shows that male nurses have the gender-identity and play roles as men in daily nursing activities and other services. The results provide several insights on how to share roles between male and female nurses, giving some help to manage cooperation between male and female nurses.

Key Words Words: psychiatric nursing, male nurse, role